

脱原発福島県民会議代表 石丸小四郎さんの意見表明

2012年10月9日

私は福島第一原発と第二原発の間の約10キロ離れているところに50年間住んでいた。昨年3月福島原発重大事故を経験し、1年6カ月が経過しました。私はもちろん福島県民の多くが苦悶を致しております

私は原発過酷事故発生前から原発ほど…差別的なものはないと原発反対を主張して来ました。このシビアアクシデントに遭遇致しますと4つの言葉が数百倍、いや数千倍に膨らんで襲いかかってくるというのが率直な感想です。

まず政府高官は自分は安全地帯にいて「直ちに健康に影響はない」と言いながらSPEEDIで、米国エネルギー省航空モニタリングも秘匿され、私達は被ばく致しました。原発から北西の上羽鳥という地名の所があります。ここでは1時間に1590μシーベルト被ばくした人がおられます。私達公衆の被ばく限度の1年半を越える被ばく線量になります。そこでまたそこから10キロメートル離れたところに避難生活をした人たちが330μシーベルト毎時という被ばくをするという状況がありました。

私達はこのような事は本当に慙愧に堪えないという思いで過ごしております。福島県の人口は202万人を大きく割り込みました。毎月1500人づつ位、減少しています。今後10年後には170万人を切ると、されている。そして避難者は16万人を越え、1年6カ月が過ぎました。ただ単に16万人と言いますが、栃木県の小山市、千葉県の習志野市という人口が消滅したに等しい数の福島県民が故郷を去っておりま

す。

そしてこの震災関連死、1104人になりました。1000人を超えました。これもまた皆さんには簡単に聞き流して欲しくない。それは福島県民の多くが「原発さへなかったら」という言葉で代表されております。私から言いますと、少し厳しく言いますと、「これは殺人ではないでしょうか？」避難中、避難過程の中で、疲労が蓄積し、そして持病が悪化しそして初期治療ができないまま、無念の死を遂げた人、さらに自殺者、そして健康で自立した生活をしてきた高齢者が次々と倒れています。本当にこんなに葬式の多い2年間があるかと思えます。

私はこのことをきつい言い方でしょうけれど、受け止めて頂きたい、もしそうでなければ、未必の故意の犯罪だと思っています。積極的に意図するものではないけれど、そうなるということを推定をすると、これはまさに犯罪であります。このことを是非受け止めて頂きたい。

最後に事故収束宣言が去年の暮れに、内閣総理大臣から発せられました。私はこれも犯罪に等しいと思っています。

今も毎時1千万ベクレルの放射能が放出されております。3機の原子炉はメルトスルーして、原子炉格納容器からあふれている。そして毎時20トンの水を投入しても格納容器が破損をしておって、40センチから60センチの水位にしかならない、そして地下には10万トンの放射性汚染水がたまっておる。そして敷地外にはタンク、

これは20万トン、そして3年後には驚くことに、70万トンになるという。70万トンとは、1立方メートルのマスを並べたらこれは70万メートルです。これは700キロです。福島から青森に至る距離に1立方メートルのマスが並ぶという時代なのです。とんでもない状況です。

そして、この収束作業に係る人達への環境は72.9シーベルトというこの7シーベルトで致死量というこの10倍の線量が依然として続き、そこにこの1年4カ月の間に2万2千人の労働者が投入され、大変な被ばくをし、そして線量計を持たずに入ったという人が40%にも及ぶというのではないですか。

そしてこのまま行きますと、福島原発の労働者の供給が途絶えるのではないかと、実際にですね、この問題が内部で取りざた

されています。原発の仕事が何なのか分からないまま働かされている人が多くなっている、この現状を皆さんご存じなのでしょうが、このまま労働者の使い捨てが横行するならば、原発収束、廃炉の作業それ自体が放棄されねばならぬような事態に立ち至ると危惧しております。そうじゃないですか、30年、40年、そしてスリーマイル島の収束作業の教訓から言えば、訓練された労働者が5万から10万人必要だということではないですか。もし、そういう事態に立ち至ったならどうなるかということ、福島県はもとより、東日本、いえ日本全体の大変な課題であるということ、いくつか申しあげましたけれど、きっちり受け止め、回答を是非ともして頂きたいということ、最後に申しあげまして現地からの現状報告に変えさせて頂きたいと思います。